

---

# バイオハザード ~Hell's~

髭伯爵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイオハザード ～Hell's～

### 【Nコード】

N2036K

### 【作者名】

髭伯爵

### 【あらすじ】

アメリカの地方都市・シエラシティ。この街で、かつてラクーンシティで起きたバイオハザードの悲劇が再び繰り返される・・・。

\*公式設定と矛盾する箇所がいくつもあります。ご注意ください。  
い。

## Chapter 1 - 1 「地獄の始まり」(前書き)

幾つか注意点を

1・舞台であるシエラシティはラクーンシティと非常に良く似た街という設定なので、施設や位置関係、情勢などで似ている部分があります。

2・年代は2005年。公式設定では元凶であるアンブレラが滅んでいる時代となっておりますが、この作品内ではその設定は無視してまだ平然と存続しているということになっております。

以上のことを踏まえて、気に入らないというのであればそっとサインしちゃってください。

## Chapter 1 - 1 「地獄の始まり」

宵闇に染まった街を、少年と少女の2人が乗った一台の自転車が駆け抜けていく。その背後にある巨大なスポーツスタジアム周辺からは、何かのうめき声と怒号。そして銃声と悲鳴が聞こえてくる。

明らかに何かしらの事件が起きているであろうスタジアム周辺から全速力で離れていく少年達の顔には、ありありと恐怖と焦燥が浮かんでいた。

「おおい!? スピード出しすぎやしないか!?!」

「うるせえ! こんなヤバイ状況でチンタラ走ってられるか!」

「この自転車古いつつってなかったか!? なんかミシミシ聞こえるし!」

「…神に祈れ!」

「おおおおい!?!」

仲良くぎゃあぎゃあ騒ぎながら、フレームから不吉な音を立てている自転車で進んでいく2人。

何故、彼等はこちらまで急いでいるのか。ただ犯罪現場から逃げるのならここまで急ぐ必要はない。寧ろまず警官などに保護してもらった方が安全だ。

その理由を語るには、まず数十分前に時間を遡らねばならない…。

「あーやっと補習終わったぜー」

「何で俺までつき合わされたんだろうか…。 てかお前部活はどうした？ バスケ部は？」

「自主休講だ！」

「素直にサボりって言おうなダメツト」

「ダメツトって言うんじゃないよトーヤ！」

「なら行動を改めんかい」

周りが暗くなり、ポツポツと街灯も点灯を開始し始めてきた時間。シエラシテイの高校の制服を着た、一組の男女が談笑しながら街を出歩いていった。

1人はショートヘアの赤い髪と快活そうな雰囲気特徴的な白人と思われる女子。時折浮かべる野性的な笑みと乱暴な男口調が、彼女の人となりをよく表している。

もう1人の男子は、隣の女子に比べるとやや線の細い東洋人の少年。女子の言葉に時折呆れた様子でため息を吐いている辺り、何となくだが苦勞人という感じを受ける。だがため息を吐いた後苦笑も浮かべているところを見ると、隣の女子を嫌っていることはなさそうだ。

「まったく、公式試合目前だったのにエースのお前がサボっていいのかよりゼット？」

「いーンだよ別に。最近チームメイトの大半が病欠してて自主連しかないんだし」

「…そーいや最近そんな奴らばっかだったな」

リゼットと呼ばれた女子 本名リゼット・バーデン が

不満そうに鼻を鳴らして部活をサボった理由を告げると、トーヤと呼ばれた男子 本名トーヤ・タカミネ が終始人の少なかつた教室を思い出す。

「このところ人がどんどん倒れてくよな？ 妙に血の気のない面してる奴多いし」

「ああ。確か突然暴れ出した奴とかもいるらしいぜ。ちよつと前までフラツフラだった奴が突然隣に居た奴に噛み付いたりとか」  
「そついや通学路の途中で何度かパトカー止まってんの見かけたな……」

ここ数日、2人が暮らしているシエラシティでは異常事態が起きていた。体調不良や病気で休む人が多かつたり、市民が何の前触れもなく凶暴化したりなど。

元々治安の良いシエラシティにおいて、ここまで混乱が広がるというのはかなり珍しいことだった。

「確かリツキーの奴も病気で寝込んでんだっけ？」

「あいつは普通の風邪だったよ。昨日見舞いに行ったときは顔色がちよつと赤いだけだったし大丈夫だろ」

「だといいんだけどなあ……ん？」

昨日今日と風邪で休んだ友人の心配を2人でしていると、不意にリゼットが顔を横に向ける。そちらには小さな家電量販店があり、リゼットの視線は店内のショーウィンドウ内に納められたテレビへと向けられていた。

「？ どうした？」

「いや、今日はニュースやってんだなーと。いつもはドラマの再放送とか天気予報とかなのに」

「そついやそつだな」

家電量販店のテレビは全て同じチャンネルのニュース番組になっており、へりに乗っているテレビキャスターがスタジアムの映像と

共にやや興奮した様子で『シエラスタジアムで暴動発生！』と伝えていた。

『こちら上空の映像です！ 試合中突如としてスタジアム内で暴動が発生！ 現在観客や選手、職員が入り乱れて破壊活動が行われています！ 始まりは観客の乱入騒ぎだった筈がどうしてここまで大規模な暴動へと発展したのでしょうか！？』

やや早口でまくし立てるキャスターの声と共に、スタジアムの映像が映し出される。ただ、上空からの映像のため、あまり詳しく状況を確認することができない。精々スタジアム周辺にパトカーらしきものが何台も止まっているのが見える程度だ。

「おーいもうちょっと拡大しろよー。これじゃよく分からねえだろうが」

「落ち着け。…これが逃げてる連中じゃないのか？」

「あーそれっぽいなあ。でも随分必死じゃねーか？」

「よっぽどヤバイのか？ 毒ガスでも巻かれたか？」

トーヤが指差した画面端ギリギリでは、群集が我先にとスタジアムの出入口から逃げ出している光景が映っていた。

「うわー人がゴミのようだ…」

「その表現はここで使うべきじゃないと思うんだがな。ていうかホントに何があったんだ？」

くだらないことを言ったりリセットにツッコミを入れた後、トーヤは首を傾げる。上空からの映像は余り拡大されていないので、詳しい様子が確認できないのだ。

「もつと拡大しろよー。これじゃわかんねえぞー」

「へりに乗ってる以上あんまし降下させたら事故る。これ以上は無理なんだろ」

「チツ！…じゃあ見に行こうぜ！」

「え？ マジ？」

「マジ！」

カ一杯頷くりゼットに、トーヤが目を丸くする。驚きと呆れで見事に凍りついたようだ。

「…お前はアホか」

「アホじゃねーよ！」

「んじゃ何でわざわざ危険な場所に行きたがるんだよ！？ 暴動が起きてるとか言ってるんだぞ！？ 巻きこまれたら怪我じゃ済まないだろーが！」

「だーいじょうぶだって！ 遠くからちょっと見るだけだから！」

「…こいつはも〜！」

全く人の話を聞こうとしないリゼットに、トーヤは頭を抱える。

トーヤとリゼットの関係は大体いつもこんな感じだった。リゼットが思いつきで行動し、それに強制的に付き合わされるトーヤ。

ぶつちやけ、警察のお世話になった経験もあったり。

時折今この場にはいないもう1人の友人も巻き込まれたりするが、今日は生憎と風邪で寝込んでいてこの場にはいない。つまり、巻き添えは完全にトーヤ1人が受け持つこととなった。

この後自分がどれだけ苦労する羽目になるのか。それを想像してトーヤは軽い頭痛に襲われる。

「うわぁ帰りてえ…」

「おーいこの自転車パクろうぜー」

「俺の意見はオール無視かコラア!？」

暢気に電柱の傍に立てかけられていた誰かの自転車をパクろうと提案してくる友人に思わず叫び返すトーヤだったが、その程度で止めるようなら彼も頭を痛めるようなことはなかったろう。

「いいから鍵開けてくれよー。スタジアムこっから歩きだと面倒だし」

「だったら行かなきゃいいだろうに…。ちょっと待ってる」

急かしてくるリゼットを見て呆れたため息を吐きつつ、トーヤは制服の内ポケットからピッキングツール（＝開錠のために使われる針金の束）を数本取り出し、それを両手に持って自転車の鍵部分を弄り始める。

実は手先がかなり器用なトーヤは鍵開けを得意としている。愛用のキーピックで自転車や原付、果ては一般家屋の鍵すらこじ開けてしまうその技術は最早犯罪レベルなのである。

最初は簡単な鍵をこじ開けられる程度だった技術がここまで成長したのは、ひとえに騒動を持ち込んでくるリゼットの所為なのだが。

「いよつと。ほれ、乗れるぞ」

「さっすがトーヤ。相変わらず見事な腕前で」

「ぶつちやけ犯罪だけだな。ま、見る限り古そうな代物だし、警察に通報されたりはしないかもな」

ガチャンという音と共に自転車の鍵が開錠され、それを見たりゼットが小さな拍手をする。時間にして僅か30秒ほどで開錠したのだ。見事と言っ他にないだろう。

「さーて、それじゃ行きますか!」

「はあ…。不安だ…」

妙にハイテンションなりゼットが運転手となり（運動をしているリゼットの方がトーヤより体力があるため）、物凄く不安そうなたーヤを後ろに乗せ、自転車はスタジアムへと向けて走り出していた…。

後にトーヤ達は、スタジアムへと出向いたことを後悔することとなる。何故なら、彼等のこの行動が、地獄の中を彷徨うきっかけだったからだ。

「飛ばすぜー！ヒヤッホー！」

「おおいなんか不吉な音立ててるから無茶すんなー！？」

待ち受ける運命を知ることなく、2人はまるで乱暴な扱いに不満の声を上げているかのごとく軋む自転車を漕いで、スタジアムへと向かっていく。

悪夢は、もうすぐ始まる。

（15分後）

「ここらでいいだろ。そこら辺に止めとこう」

「うーい」

トーヤに指示され、リゼットはビルの近くで自転車を止める。交通量の少ない裏路地にいるためなのか、周囲には人がいない。

自転車のビルの壁面に立てかけると、2人は路地を出て少し歩いた場所にあるスタジアムへと向かいます。スタジアム方面からは、サイレンの音と悲鳴が微かに聞こえてきている。

「騒がしいなあ」

「そりゃ大規模な暴動なんているのが起きてるんだから当たり前だろう。寧ろ途中でパトカーを見かけなかったのが不思議なくらいだ」

何せ盗んだ自転車に乗っているので警察に目を掛けられるのはマズイと、後ろに乗っていたトーヤがかなり警官やパトカーに対して気を張っていた。にもかかわらず、すれ違うことはおるか警官を見かけることもなかったのだ。

「そついや見かけなかったな。何でだ？」

リゼットに尋ねられたトーヤは、歩きながら少し考え込んだ後、口を開いた。

「…多分動員できる警官はとっくにスタジアムに着いてるか、もしくは他の場所でも暴動が起きてて人が回せないか、だな」

「うええ！？ マジかよ！？」

「多分な。 となるとすぐに帰った方がいいかm」

「それなら早く見に行つて帰ろうぜ！」

「・・・見ずに帰るといふ選択肢はないのね」

さりげなくこのまま帰るよう誘導しようとしたトーヤの目論見は、慌てて走り出したリゼットによつて脆くも崩れ去り、肩をガツクリ落とすトーヤ。

「おい早く来いってー！」

「あーはいはい今行きますよー」

少し進んでからトーヤがついてきていないことに気づいたりゼットが、その場で駆け足したまま呼んでくる。 トーヤは諦観の念がたつぷりと籠った笑みを浮かべると、ため息を吐きながらリゼットの元へと歩いていった。

「てかあんまり近くまで行くなよ。 巻きこまれる」

「分かつてるつて。 遠くから見ただけ・・・」

そう言つて先に路地から出てスタジアムへと続く大通りへと出たリゼットが、スタジアム方面を見て固まる。

「？ おい、どうした？」

「・・・」

後ろからトーヤが声を掛けても、全く反応しない。 顔を驚愕と恐怖で固めたまま、二の句を告げられないでいる。

「（何かあったのか？）」

リゼットのただならぬ様子を感じ取ったのか、トーヤも急いで路地から抜け出し、スタジアムへと目を向ける。

「な!？」

そして、リゼットと同じように絶句した。

「いやあああ!! 助けてええ!!！」

「ひいい来るなああ!! あああああがああああ!!！」

悲鳴を上げて逃げ惑う市民。だが恐怖と混乱で麻痺した思考でまともな逃走などできるはずもなく、次々と犠牲になり、アスファルトに血の海を築いていく。

そして、その市民を襲っているのは暴徒のようだ。

うおあああ・・・

あああ・・・

いや、本当に暴徒なのだろうか？ 血で汚れ、まるで浮浪者のようにボロボロな服。口から出るのは唸り声だけで、歩き方は夢遊病者のように頼りない。

そして何より目を引くのは、所々傷つき、腐乱しているその体だった。その姿は、暴徒と言うより【ゾンビ】と言った方がしっくりくる。

そして、【ゾンビ】がやることと言えば、一つしかない。

うあああ・・・

「や、止めて来ないでいぎゃああああああ!!——!!——!!」

生きた人間を、『食らう』。そんなB級ホラー映画の光景が、スタジアム周辺で本当に起きていた。

恐怖で腰が抜けた男性に。逃げ足の遅い女性に。状況を受け入れることができず固まった子供に。神へと祈り続ける老人に。

【ゾンビ】達は容赦なく群がり、食らい付き、その血肉を美味そうに食い干切り、噉っていく。

「撃て！ 撃てええ！！！」

「畜生死ね！ 死ねえ！！！」

現場には何人もの警官が到着しており、ゾンビ達へと必死に応戦している。だが……。

「何だよ！？ なんであいつら死なないんだ！？」

「く、来るな！ 来るなあがああがああ！！！」

彼等の持っている銃を幾ら当てても、ゾンビは死なない。怯むことはあっても、倒れることはあってもすぐに起き上がり、弾切れになった警官たちに牙を突き立てていく。

まるで、戦場。 さながら、地獄絵図。

「何だよ、コレ……」

「……」

あまりにも凄惨で非現実的な光景に、2人はただ固まるしかなかった。

## Chapter 1 - 1 「地獄の始まり」 (後書き)

登場キャラクターの紹介

リゼット・バーデン

年齢：17 性別：女

- ・活発な高校2年生。運動神経に優れ、所属するバスケット部の練習の賜物が素早い身のこなしが武器。
- ・トーヤとは中学時代からの腐れ縁で、彼を(無理やり)連れ立てはトラブルに巻き込む。

現在の持ち物

- ・学生鞆(中身は空)
- ・盗んだ自転車

トーヤ・タカミネ

年齢：17 性別：男

- ・家庭の事情でアメリカへと渡ってきた日本人高校生。 中学時代にリゼットに気に入られて以来、彼女と行動を共にするようになる。以後、彼女のフォロワーやトラブルに苦しめられる苦労人。
- ・手先が器用で、愛用のピッキングツールを使用して大抵の鍵を開けてしまう。ただ、今まで挑んだことのない鍵には対応できない。
- ・運動神経は人並みだが、軽度のガンマニアで銃の扱いに優れる。

週末は必ず近場の射撃場で撃っているほど。

現在の持ち物

- ・学生鞆（中身は空）
- ・ピッキングツール

Chapter 1 - 2 「友人宅へ」 (前書き)

いかに最後の方がきちんと纏められんかったかもしれん

もう少し表現力欲しいわー・・・

## Chapter 1 - 2 「友人宅へ」

人が人を食らい、『死』へ誘っていく……。そんな現実離れた光景を見て、すぐに行動できる者はそうそういない。それがまだ若い高校生ともなればなおさらだ。

だが、彼等2人は他の同年代とは違いトラブルに対してある程度の経験があり、なおかつ自らの力で解決してきた実績があった。

「……くそっ、おいリゼット！ 正気に戻れ！」

「あ？ え？」

先に正気を取り戻したのはトーヤだった。彼は素早くこの場からの逃走を心の中で決定すると、まだ呆然としているリゼットの肩を掴んで揺すった。

「ここから逃げるぞ！ 自転車のとこまで戻るんだ急げ！」

「あ、ああ……分かった！」

トーヤがなるべく簡潔に逃げることを告げると、リゼットもすぐに気を取り戻し、頷き返す。互いがあることが、現実を受け入れることとパニックを防ぐのを手助けしたのだ。

2人は急いでその場から離れると、先ほど出てきた路地へと戻り自転車へと駆け寄る。面倒だったため鍵は掛けていなかったが、幸い盗られていることもなく壁に立てかけたままだった。

「よし、とつとと逃げるぞ！」

「そうしよ……っであー！」

トーヤがサドルに跨り今度はリゼットが後ろへ乗ろうとしたとき、

リゼットが何かを思い出したかのように声を上げた。

「何だよ？ さっきの現場に知り合いでも居たのか!？」

「違う！ リッキーのことだよ!」

「・・・なんでアイツ？」

この場にはいない友人      本名リキッド・サイモン      の名を

突然告げてきたリゼットに、困惑するトーヤ。

「アイツん家<sup>ち</sup>つて確かスタジアムから結構近かったじゃん!? このこと教えてやらねーと!！」

「ちょ、おまアイツん家こっから反対側だぞ!? スタジアムの向こうなんだぞ!？」

「当たり前だろ!？ 病み上がりの奴が身軽に逃げられるわけないだろうし!！」

「〜!」

数瞬頭をバリバリと掻きながら思案した後、トーヤは自転車から降りた。

「・・・お前が運転しろよ」

リゼットもそうであるように、トーヤもまたお人好しなのだ。

友人を見捨てて逃げるという選択肢は絶対に選ばない。 例え危険時であろうともだ。

もっとも、仮にトーヤが逃げることを優先させていたとしても、結局は強引なりゼットに連れられることになるが。

「さすがトーヤ！ お前最高!」

「こ、コラ抱きつく暇があったら急ぐぞ!」

喜びの余り抱きついてきたリゼットを、やや顔を赤くしながら引き剥がす。思春期の青少年にとって異性のハグは中々に刺激が強い。わりとスタイルの良いリゼットに抱きつかれたとあっては特に。

「ほら、早く出せよ！」

「了解」

気恥ずかしさを何とかリゼットに気づかれないよう彼女の背後に回り、背中を押して出発するようせかす。

「いよっしっしっかり掴まってるよお！ 飛ばすぜ！」

「できれば安全運転を希望す」

「却下！」

「話を聞けえええ……！」

この先何が起こるか分からないため反応しやすい低速で行くよう伝えようとしたトーヤだが、完全に臨戦態勢に入ってしまったというリゼットが聞く耳を持つはずも無く。

トーヤの叫び声と自転車を漕ぐ音を残しながら、結構なスピードで自転車はリキッドの家へと向かっていった。

（10分後）

「うう、疲れた」

「飛ばし過ぎなんだよお前は……。二人乗りしてんだぞ」

「気合で何とかなるかと思って」

「ちよつと黙れダメツト」

2人は現在スタジアムを通り過ぎ、リキツドの暮らすマンションやアパートの立ち並ぶ住宅街の人通りの全くない路地を移動していた。

リゼットが疲れているのは、トーヤの指示でゾンビがいると思われるスタジアム周辺を避けて遠回りなルートを使用した上、リゼットがペース配分を考えずにガンガン自転車を漕ぎまくったためだ。まさに自業自得。

「交代してくれよ」

「黙って運転してろ。今アイツに連絡入れてるんだ」

だるそうにペダルを漕いでいるリゼットには取り合わず、トーヤは片手で自転車に乗る前に鞆から取り出しておいた携帯電話でリキツドの携帯電話へ連絡を入れていた。

「早く出るよオイ……」

もし電話が通じなかったら。電話に出なかったら。そんな悪い予感を振り払いながら携帯を耳に当て続ける。やがて、数回のコール音の後……。

『はいもしもし？』

電話越しに、のんびりとした声が聞こえてきた。それがリキッドの声だと分かったトーヤは、安心で少し顔を綻ばせる。

「リキッドか？ 今家にいるんだよな！？」

『え、ああいるよ？ 熱も下がったんで部屋でゴロゴロしてた』

電話からは、微かにリズムカルな音楽が聞こえてくる。どうやら本当にそうらしい。

「なら、今からそっちに行くからちよつと逃げる準備して待ってる！」

『は？ 何で逃げる準備？ また警察に追われてるの？』

「……お前今日テレビ見たか？」

『見てないけど』

「……じゃあ知らないか」

トーヤは電話越しのリキッドに聞こえないよう舌打ちをする。

スタジオから少し離れただけで、向こうでの悲鳴や銃声などは聞こえなくなっているのだ。テレビも見えていないリキッドが迫ってきている命の危機に気づけるはずもない。

「リッキーの奴気づいてないのかよ！？」

「この辺りはまだ静かだしな。テレビも見えてないらしいし、気づけなくても仕方ないな」



そう告げると、トーヤは通話を切った。リキッドとは高校に入ってから付き合いたが、それ以来ともにトラブルと一緒に潜り抜けて(または巻き込まれて)きた仲だ。逃げる準備とついでに情報収集程度はやってくれるだろうと信じているのだ。

「こんなところでも出てくるとかマジかよ……」

先ほどファインプレーを見せたりセットが、自転車を漕ぎながらげんがりしている。周辺が静かなので、てっきり大丈夫だろうと思っていたのだ。

「一応想定範囲内ではあるんだが、こうなるとリキッドん家の辺りも気を抜けそうにないな」

「アタシさつきみたいに避けれる自信ないぜ……」

携帯をポケットに仕舞い冷静に状況を分析しているトーヤも、冷や汗を流している。先ほどのスタジアムでの惨劇を思い出しているのか、顔色も悪い。

「ってそうこうしてる内に見えてきたぞ。リキッドのマンション」

「マジか……。腹括るしかないのな」

後ろのトーヤが指差した先にマンションを確認したりセットは、一つ息を吐いて気合を入れなおすと、マンションへと向けて力強くペダルを漕いでいく。

やがて、マンションへと到着した二人は、マンションの正面玄関入り口を見て固まる。

「うわぁ・・・」

「これは予想外・・・」

うぁぁぁ・・・。

おぁぁ・・・。

マンションの正面玄関前に、何体ものゾンビがたむろしていたのだ。流石の2人も、一旦止まって作戦会議を開く。

「くっそ、一か八か自転車で特攻かけるか？」

「却下。あの数じゃ突破できそうにない」

「じゃあどうする？」

「どうすっかな・・・」

ゾンビ達が集まっている場所から離れた場所で相談している2人やがて、マンションを見ながら考え込んでいたトーヤが、あることを思い出す。

「・・・そうだ、非常階段！ あそこ確か施錠されてるから、ゾンビがいる可能性が低い！」

「了解！ 行けぜ！！」

トーヤがマンションの端にある非常階段を指差すと、すかさず発進。自転車から降りていたトーヤもすかさず乗り込み、2人は非常階段へと駆けて行く。

「えーと、あそこだな！」

「ああ！ 俺が降りて鍵開けるから周りを警戒しといてk」

非常階段が見え、トーヤや先に自転車を降りて鍵を開けにいこう

としたとき、またもやゾンビが現れた。

あああ・・・。

「またひよっこりキターー!?!」

「てか非常階段に近づいてきてんだが!?!」

非常階段の手前にある自転車置き場から現れたゾンビは、まるで2人を妨害するかのようには非常階段の入り口へと近づいていく。このままでは非常階段を使用することはできない。

「くそっ、他の入り口を探すか!?!」

「そんな必要ねーよ。 トーヤ! 今すぐ自転車から降りろ!?!」

「え? 今すぐ!?!」

「早く!?!」

「わ、分かった」

まだ走行途中の自転車からトーヤが器用に降りると、リゼットはそのままゾンビへと自転車を走らせる。

「とおりゃあ!?!」

そして、勢いのついた自転車から思い切り飛び降りた。

ドガシヤア!!

突然運転手のいなくなった自転車はそのまま真っ直ぐにゾンビの元へと向かっていき、盛大な音とともに衝突した。

元々足取りのおぼついていたいなかったゾンビが耐えることなどできるはずもなく、ゾンビは自転車に巻き込まれるように倒れた。

「ツシヤア狙い通り！」

「ミスったら怪我か、ゾンビに突っ込む羽目になってたろうがな。  
よし、開いた」

草むらに飛び込んで怪我無く着地し、ガッツポーズをしながら駆け寄ってくるリゼット。その間にトーヤは非常階段へ続く扉に掛けられていた南京錠を開錠していた。

「そ念のために閉めてってくれ！ここを脱出ルートに使うかもしれん！」

「分かった！」

リゼットに開錠したままの南京錠を放ると、トーヤは先にリキッド宅のある3階へと階段を駆け上がっていく。このマンション内へ続く扉にも鍵が掛かっているのです、それを開錠しに行ったのだ。リゼットが格子状の扉の隙間から手を出し、南京錠を掛け直す。南京錠を一度引っ張ってきちんとかかっていることを確かめ手を引っ込めた瞬間、

ウアアア・・・！

先ほど自転車をぶつけられたゾンビがリゼット目掛けて襲い掛かってきていた。

「うおお！？」

ガシヤアン！

鍵をかけるのが後数瞬遅れていれば、リゼットはゾンビに襲われていただろう。だが、流石に鋼鉄製の格子の扉を破壊するのは無理なのか、ゾンビは虚しく扉を叩き続ける。

「へっ！　そう簡単にアタシを食えると思うなよ！」

扉越しに手を伸ばしてくるゾンビに捨て台詞を浴びせると、リゼットは階段を駆け上がっていく。3階では、丁度トーヤが非常扉の鍵を開錠して扉を開けているところだった。

「トーヤ！　そっちは大丈夫か？」

「3階には今んとこ目に付く場所にゾンビはいないな。　そっちはちゃんと錠前掛けてきたのか？」

「勿論！　これではらくゾンビどもは入ってこないぜ！」

「OK。　なら、とっととアイツン家に行くか」

「おう！」

合図も何もなしに、2人は全く同じタイミングで駆け出した。その足取りに、不安や恐怖といった感情による躊躇いは微塵も感じられない。　その理由はいたってシンプルだ。

『互いがいるから』

それだけで、2人は歩みを止めずにいられる。　どちらかが恐怖に駆られても、支え合うことができるから。　励ましあうことができるから。

2人が揃っているから、恐れず踏み出せる。

「リキッドの家どこか覚えてるか？」

「えーと・・・確か203号しつ」

「ここは3階だが？」

「・・・」

地獄のような状況でも、全くブレずに進んでいく2人。 彼らはこの地獄から抜け出すため、自分達の到着を待っている友人の家へと真っ直ぐ向かっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2036k/>

---

バイオハザード ~Hell's~

2010年10月11日11時12分発行